

マザー・テレサは聖人に

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

9月4日、マザー・テレサは、ヴァチカンの法王フランチェスコより聖人として宣言された。午前中サンピエトロ広場には、それを祝福するために、インド人を中心に、世界から10万人以上が集り、法王の宣言を心待ちにしていた。正午前の法王の宣言と共に、広場は喜びの歓声で包まれた。マザー・テレサの修道会の人たちが、139カ国から集まり、マザーの列聖を喜び、またその喜びを仲間と分かち合っていた。

法王は、自分の施政において、「守護聖人」を得たようなもので、彼女に絶対の信頼を置いている。これは法王パオロ6世、ヨハネパオロ2世、ベネディクト16世と続いてきたものだ。法王達は、「この世のものは必要があるために、神によってこの世に現されたのだ」といったマザー・テレサの言葉を、しばしば引用している。さらに彼女の「未だ生まれていないものは一番の弱者であり、最貧の者である」という妊娠中絶に関する言葉は、上記の法王達を勇気づけてきた。法王フランチェスコは演説の中でこの言葉をよく引用している。また法王は、彼女を「ボランティア」の「元祖」であり、「守護聖人」であると定義している。そして、「聖人テレサ」(サンタ・テレザ)と呼ぶのは何かピンとこないため、今まで同様に、親しみと尊敬を込め「マザー・テレサ」と呼ぶ方が適当だろうと提案した。

それでは、マザー・テレサの足跡を辿ってみよう。彼女は1910年8月26日現アルバニアのスコピエに生まれた。名前はアグネス・ゴンジャ・ボアジュと言った。生涯を伝道生活に捧げようと思いついた、1926年9月アイルランドのロレッタ修道女会に入り、名前も変わり、修練女マリア・テレサと呼ばれるようになった。1929年1月、インドのカルカッタ(コルカタ)に行き、少女たちに「永遠の誓い」をさせる任務を背負った。その頃、その修道会の中で、私は一番幸せだったと述懐している。そこで、生涯の最も大きな転機となる出来事があった。それは、1946年9月10日、マザー・テレサがカルカッタから南のダージリンにある同会の聖心修養所に向かっているときだった。「私を一生懸命に呼ぶ者がいる。それは十字架にかかったキリストで、喉が渇いた、水が欲しい」と言っていた。さらに「カルカッタの貧者の中の貧者に光を与え、彼らを救え」と諭された。それを契機として、彼女は1948年8月17日、ロレッタ修道女会を退会し、青い線が入った白いサリーを羽織り、カルカッタのスラム街を歩き回り始めた。初めはもちろん彼女一人だけの行いだ。そのうちに彼女に賛同し、彼女の手足のよう動く者も出てきた。そこで、彼女らを中心にして「神の愛の宣教者たち」が結成され、1950年10月7日、カルカッタ教区長より、新しい修道会として公認された。それ以降の、マリア・テレサたちの活動は世界的に知られている。1952年カルカッタの女神カーリーの神殿の横に“死を待つ人の家”(Nirmal Hriday)をオープン、そこに市で一番貧しい通りに捨てられ、死に瀕する人々を運び込んだ。

そして“孤児の家”(Shishu Bavan)を作り、身寄りの無い子供達を収容、さらには“平和の町”(Shanti Nagar)を設立、ハンセン病患者を集め、治療に専念する。そこには、自活のための設備も整っている。これらのカリタスの波は大きく、カルカッタの町だけに留まらず、インド全体に広がり、その後、法王パオロ6世の依頼によって、イタリア、そして世界中へと広がっていった。そうして、あちこちの施設の開所式に出席するために、世界への旅が始まった。当時開所は不可能と思われていたソ連やキューバ、ガザやカンボジアへも活動が広がった。

彼女の功績は世界的に認められ、1979年にノーベル平和賞が授与された。そして、1997年9月5日息を引き取った。享年69歳。死後2003年10月19日法王ヨハネパオロ2世によって、「福者」として宣言された。

マザー・テレサの「聖人」認証に関する関係者のコメントを見てみよう。インドの首相ナレンドラ・モディは次のように述べている。「マザー・テレサは、アルバニア生まれだが、……全生涯をインドのために、特に貧なる者を救済するために

全生涯を捧げてくれた。彼女の功績が認められ『聖人』になることは我々インド人にとっても非常に嬉しいことだ。」

また、インディラ・ガンジーの子息ラジブ・ガンジーと結婚したイタリア出身のソニア・ガンジーは次のようにコメントしている。「インドの2千万人のカソリック信者を含めて、インド全体が大きな名誉と喜びに包まれている。マザー・テレサの奥深い愛の実践、心の奥深い気高さ、神に仕える誇りと謙虚さに感嘆している。」

ここで、イタリアの有名な評論家でジャーナリストのティツィアーノ・テルツァーニが1996年 *Corriera della sera* (ミラノの日刊紙)に投稿した、マザー・テレサとの2週間の生活記を紹介しよう。

“私が、マザー・テレサにインタビューを終え、テーブルコーダーを止め、彼女に貴重な時間を割いてくれたことを感謝したとき、彼女は青い目で、ジッと私を見つめながら、「なぜ、私にこのようなことを尋ねるの?」と言った。私は「貴女について書きたいのだ」と答えた。すると、「私のことを書かないで、神のことを書いて」と空を見ながら言った。さらに、次のような話をした。「書くことは止めなさい。私たちの施設の一つに行って働きなさい。死にかかっている人の家で少し働いてみなさい。ある時、私は身体にウジが沢山まわりついた人の世話をしたことがある。彼の全身を洗い、ウジを一匹一匹取り除くのに数時間を要した。最後に彼は『私は動物のように路上で生活していた。ウジに全身を覆われていたが、今は綺麗にしてもらって、天使のように死んで行ける』と言って素晴らしい笑顔を見せてくれた。これが私たちの仕事だ。行為を示す愛。至極簡単なことだ。」最初、テレサは5ルピーのお金しかなかった。それが今では世界の122カ国に600カ所の施設を持っている。そこで4,000人以上の修道女が働いている。そこには、コンピューターもテレビもラジオもない。エアコンも扇風機もない。あるのは古い手打ちのタイプライターだけだ。

マザー・テレサはさらに語った。「私たちは看護師ではない。社会奉仕者でもない。私たちは修道女なのだ。私たちの施設は病院ではない。世間が嫌がる人たちの居るところだ。愛を必要とするところだ。」私はマザー・テレサに次のように尋ねた。「貴女は教会とガリレオどちらを選ぶか?」すると次のように答えてくれた。「なぜ西欧では、路上で死んだ人をそのまま置いておけるのか。……私たちは食物や衣服を避難所に与える。特に全ての人から排除されたと感じる人々に愛を与える。愛されていないと感じることは、空腹より、寒いと思うことよりも悪いことだ。これが世界の問題であり、西欧の問題でもある。」彼女に妊娠中絶について尋ねると次のように答えてくれた。「中絶というのは今日の世界の最大の脅威である。生命は聖なるものだ。神だけが司るものだ。家族計画で子供の数を制限しようとするなら、自然の方法しかない。」また、貧について尋ねると、「神は私達を創った。そして、私たちが人間が貧を創った。私たちが貪欲さを放棄した時、貧の問題は解決される」と答えた。私は、それがガンジーの言葉のように聞こえた。そのことを尋ねると、「神は私に貧者を救う役割を下された。未来に関しては、神はまた違う誰かを選ぶでしょう」と答えた。」

2016年7月21日、法王フランチェスコはマザー・テレサについてのインタビューで次のように語っている。「マザー・テレサは生涯を貧しい人に捧げたのだ。あなた方若者よ、差別の論理を、排除の論理を、一方から他方への恐れを取り壊す橋の役割をして欲しい。そして貧者のための奉仕に専念して欲しい。」「世の中で一番恐ろしい病気はハンセン病でもないし、結核でもない。孤独である。それが世の中の不合理、分割、今日我々を悩ます戦争の元でもある。」「大事なことは第一に祈り、第二に施し、第三に哀れみ、第四に家族、第五に若者だ。特に若者は希望を失ってはならない。自分の中にある未来を失ってはいけない。つねに神の手の中にあるように振る舞い、マザー・テレサのように勇気を持って前進して欲しい。」